

# 通へる夢は崑崙の高嶺の此方ゴビの原

(97・3・24)

## ——在りし日の三高の青春——

岸田達也（昭17・9・文乙）

### はじめに

西田幾多郎さんは、停年退職にさいし次の言葉を残しております。「回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであつた。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立つた。黒板に向つて一回転をなしたといえ、それで私の伝記は尽きるのである。」来春、平成一〇年三月、満七五歳教壇生活五〇年の節目を迎えて引退する私も、七五歳で逝つた西田さんと感慨は同じであります。ただ私の場合、黒板を後にした教壇生活にくらべて、短くはありましたが黒板を前にした青春は、激動する歴史の中にありました。「大東亜戦争」の開戦は三高の二年、「学徒出陣」は東大の二年のときであります。またそれと同時に、黒板を後にした教壇生活は、三高に学んだ奇しき縁を感じさせました。

それというのも、三高三年のとき西洋史を習つた中山治一先生とは、戦後同じ名古屋大学の西洋史の教壇に立つことができ、また自由寮の二年先輩であつた北村忠夫さんとともに名古屋大学西洋史の同僚となりました。さらに同じく自由寮の二年先輩であつた護雅夫さんとも名古屋大学退官後勤務した日本大学の史学科で、護さんは東洋史、私は西洋史担当の同僚でありました。これはいざれも、私にとつては三高に学んだ恵まれた縁でありました。しかし、残念ながら二人共故人となられました。本日ここで私がとくにお話し申しますのは、平成八年一二月二三日七五歳で亡くなられた護雅夫さんの学問形成と三高との関係であります。護さんは、昭和五六年に東京大学を退官されて四月に日本大学教授になられ、私も名古屋大学退官後、昭和六二年に日本大学教授になり、平成三年三月の護さんの退職まで四年間、文理学部史学科で同僚として一緒に過ごしました。護さんは、人柄は温厚で、平成四年日本学士院会員になられたところからも知られますように、学問業績は抜群でありました。

護さんの学問的関心は、モンゴル帝国から出発して、とくに突厥帝国、つまりモンゴル高原における遊牧騎馬民族国家にありました。しかもその関心の根底には、表題にいたしました「紅もゆる」の一節にかき立てられた沙漠への夢があり、在りし日の三高の青春があつたのであります。世界的に屈指のトルコ学者であつた護さんの著作目録は膨大なもの

で、本格的な護さんの業績紹介は私の能力を超えます。その著作目録はあとで述べますが、卒業論文以後のもので、学界で評価されるのはそれらの業績であります。しかし、私は、護さんの学問の出発は「三高生護雅夫」の青春にあると考えます。幸い護さんは自伝的なものをいくつか残しておりますので、それらに基づいて、どうして護さんが遊牧騎馬民族史に关心をもつにいたつか、を中心としながら同時に、護さんの三高の青春は私の青春とも重なりますので、それをも合わせて在りし日の三高の青春の一端について申し述べたいと思います。

### 護さんと私

まず私の自己紹介からいたします。私は、昭和一五年四月に三高文乙に入学し、一年前期は中寮六番のデンヂロゲ部屋、一年後期と二年前後期の一年半にわたり炊事部屋におりました。三年前期は寮総代で、そのときの庶務が本日出席している安部君、川上君、杉田君であります。昭和一七年九月に卒業して、一〇月東大文学部の西洋史学科に入学しました。三高で西洋史は鈴木成高さん、成高さんが一七年の初夏に病気になられたので、その後は井上智勇さん、中山治一さんの三人の先生に習いました。三人共、当時二〇代前半で京都大学の若手の第一線がありました。

護さんは、大正一〇年三月滋賀県長浜に生れ、虎姫中学を経て、昭和一三年に三高文甲に入学され、私が入学した昭和一五年には三年生で北寮五番の室長でした。昭和一五年前期の寮総代は、のちに東大西洋史に進学された北村忠夫さんでした。護さんは、三高を一六年三月に卒業して東大文学部の東洋史学科に進まれ、一八年九月に卒業されました。直ちに大学院に入学されましたが、すぐに休学して海軍予備学生となり、海軍兵学校に入校を命ぜられ、次いで海軍兵学校教官に任命されました。二〇年九月召集解除により復員、東大の大学院に復学して特別研究生になられました。

一方、私は、昭和一九年九月に西洋史学科の二年終了で台湾軍に入隊、二一年三月に復員しました。大学に顔を出すと、前年の二〇年九月に卒業しているということで、四月に大学院に入学しました。知らぬ間に卒業になっていたことについて、いろいろ面白い話はありますぐ、話を先に進めます。護さんは、昭和二三年に北海道大学に赴任され、私も大学院終了後、二八年に名古屋大学に赴任いたしました。名古屋大学の新設の文学部西洋史の初代教授として、中山治一さんが三高教授から着任されており、私はそこで一一年ぶりに中山さんに再会いたしました。教授にはもう一人、八高教授であつた水川温二さんがおられ、助教授にさきの北村忠夫さん、そして八高から切り替つた教養部に私がおりました。この四人共全部三高の文乙の卒業がありました。その後まもなく本日出席の尾藤正英君

(昭18・文乙)が名古屋大学の国史に来られましたが、やがて東京大学に移られました。

私は、昭和六一年三月まで三三年間名古屋大学に在職いたしました。

この間、昭和三七年三月に、護さんは「古代北アジア遊牧民族史の研究」で東京大学より文学博士の学位を取得され、私は、昭和五二年に著書『ドイツ史学思想史研究』で京都大学より文学博士の学位を取得しました。従つて学統は護さんと全く違うのです。私はむしろ京都大学の学統、学問系統であります。京都大学の西洋史の初代教授は坂口昂さんでした。坂口昂さんというと懐かしい名前なのでちょっと話しておきますと、坂口さんは明治二十五年に第三高等学校を卒業し、東大史学科でランケの門下生のリースに習いました。従つてリースの弟子で、リースの翻訳もしておられます。明治三一年から四〇年まで三高教授をされ、京都大学の西洋史の初代教授になられました。明治二五年の第三高等学校の卒業といえば、同期に浜口雄幸、幣原喜重郎、三高の校長であつた溝渕進馬、その他すぐれた人材がおられます。

坂口さんは『概観世界史潮』で有名でありましたが、本来の専門は古代史で昭和三年に亡くなられました。坂口さんは、大正の末年から昭和の初年にかけて京都大学でドイツ史学史の講義をされ、没後に岩波から『独逸史学史』という遺稿集が出ております。これは各年度の聽講学生の筆記ノートに基づいたもので、その最後の年度の筆記ノートを作られ

たのが鈴木成高さんであります。つまり、成高さんは坂口さんの最後の弟子で、その鈴木さんの三高での最後の弟子が私になりますので、私はむしろ京都の学統であります。鈴木さんは『ランケと世界史学』、ランケの『世界史概観』（岩波文庫）の翻訳で有名でありますし、また中山治一さんは私が三高のころにマイネッケを翻訳されております。このように私は三高の影響を受けましたが、護さんもあとで述べますように三高の影響がありますて、ここで一人だけ挙げておきますと、東洋史の安部健夫さんです。安部さんものちに京都大学の人文科学研究所に移られましたので、私どもはそのあとの羽田明さんに習いました。なお国史は中村直勝さんでした。直勝さんは当時京都大学文学部の助教授で、三高教授を兼任しておられました。昭和一七年の四月から私どもは林屋辰三郎さんに習いました。林屋さんは昭和一〇年の三高卒業ですから、私どもが習ったころは大学院の院生で、非常に若かつたです。その後立命館大学から最後は京都大学の人文科学研究所に移られ、現在は護さんと同じ学士院会員です。それにしても三高の歴史の先生は良かつたです。

護さんに戻りますと、護さんは昭和三一年五月に東京大学に移られ、三三年から一年半にわたつてトルコのアンカラ大学、イスタンブル大学、ドイツのハンブルク大学に留学されました。三七年に先ほどの「古代北アジア遊牧民族史の研究」で文学博士の学位を取得され、四一年に出版された『古代トルコ民族史研究』Iにその論文の一部が収められまし

たが、この『古代トルコ民族史研究』Iにより四五五年に日本学士院賞を受賞されました。

五一年にはトルコのイスタンブル大学客員教授となり、そこで一年間にわたってトルコ人の学生にトルコ語で古代トルコ語を講義したという、これはもう大変な学者であります。ソ連邦（ロシア）、トルコ、ドイツのそれぞれに代表的なトルコ学者がおりますが、日本の護雅夫さんはそれらと並ぶ世界のトップレベルの学者であります。従つて、本日私は護さんの業績について云々する能力は全くないのであります。

### 三高時代の護さんの思い出

そこです、三高時代の護さんについて私の思い出から話してまいります。私が「護雅夫」の名前を初めて知ったのは、五七年前の昭和一五年四月、三高自由寮での新入寮生歓迎コンパの夜でありました。あの夜は感激でした。会場に熱気がこもる「紅もゆる」の歌声で、私は初めて三高生になつたことを心の底から実感いたしました。次いで壇上で、総代演説・炊事委員演説に続いて北・中・南の三寮の各室の自己紹介に入り、北寮五番の順番になつたとき、小柄ながら気力の漲つた三年生の室長が壇上に立つて開口一番、「文三甲、護雅夫、護良親王の護じや」と言つた、その声音は今でも私の耳底に響いております。護さんが一九歳、私が一七歳の春がありました。今はモリヨシ親王ともいうようですが、

日大で護さんと雑談中にこの思い出を話したところ、護さんは「今は看護婦の護だよ」と言つて笑つていました。護さんは寮生活では二年生の後期に庶務委員をされ、三年生の後期に、普通は後期は二年生が総代になるのですけれども、このときは「新体制」の関係で二年生が暫くなつたあとやはり三年生が総代にということで、総代に選出されました。「僕は二度総代部屋に入つたよ」という護さんの言葉が私の耳に残つております。

また護さんは、部生活においても剣道部の選手として大いに活躍されました。護さんはすでに虎姫中学の剣道部の選手であり、三高に入学して剣道部に入ると直ちに選手に加えられ、全国の高等学校で屈指の存在であつた三高剣道部の先鋒として、よくその重責を果しましたということになります。私は、寮の廊下で出会つた護さんの独特的の歩き方、あのはずむように歩く姿を今でも覚えております。護さんは、道場では爪先で自在に前後左右に動いたということですが、寮に帰つても爪先で歩いていたわけです。私の眼底に残る廊下を歩く護さんの独特的の姿は、まさに俊敏なる先鋒の面影でありました。寮は戦後まもなく焼亡し、廊下を歩く護さんの姿も今はや全く現存せず、ただ私の回想の中に残るのみであります。まさしく在りし日の自由寮の青春の一瞬であります。

護さんは、寮と剣道部の生活に明け暮れしておられましたが、同時に文武両道で、『自由寮報』や全校の『嶽水会雑誌』によく投稿されました。とりわけ、私が当時最も強く印

象を受け今にいたるまでその題名を覚えているのは、昭和一五年の『自由寮報』に掲載された「小さい研究——陶淵明における儒教的なるもの——」であります。今は私の手元にないこの『自由寮報』を、京都の三高同窓会本部の海堀君が送ってくれましたので、題名を確認できました。よく探してくれたものです。私はこれを五七年ぶりに見ました。大変懐かしい。この「研究」は、一言で申せば、陶淵明の思想を道家的なるものと割切る通説に対して、むしろ陶淵明における儒教的なるものの存在を主張するものであります。もとよりその論証に未熟さはありますけれども、小論ながら一九歳の青年の論考としては抜群であり、後年の学者護雅夫を予感させるものであります。

### 護さんの「学びの出発」

そこで今度は護さん自身の三高時代の思い出に入つて行きます。護さんの「学びの出発」は、護さんが自ら回顧するように三高時代にありました。すでに三高時代に護さんはその関心を中国から遊牧騎馬民族に移しつつあり、やがて大学の卒業論文としてモンゴル帝国史を選び学者の道に出立するわけであります。護さんの卒業論文は、モンゴル帝国の軍事制度を扱つたものであります。もちろんただの軍制ではなく、国家構造や社会構成とも密接に関係するテーマで、要するにモンゴル帝国の国家構造に関するものであります。

その一部が昭和一九年に『史学雑誌』に掲載されました。私はそれを今でも覚えております。「探馬赤部族考序説」という題で膨大な卒業論文の一部であります。当時東洋史といえば、まず中国民族史というのが一般の風潮でありましたけれども、護さんが卒業論文で中國民族史ではなくてモンゴル帝国史を扱つたのには、少くとも二つの影響があつたのであります。一つは三高で聴いた三人の先生の講義の影響であり、もう一つは東大の先生の影響であります。

まず三高の先生の講義の影響でありますが、護さんは滋賀県の長浜の出身で、真宗大谷派のお寺の生れです。前から湖北の民俗行事に非常に興味を持つていましたが、三高でそういう民俗学また民族学さらには未開社会に対する眼を開かれたのは、藤田元春、土井虎賀寿両教授の講義であります。あの藤田教授は「よたはる」の異名の通り、湖北や滋賀県に伝わる民俗行事の数々に言及された、とくに豊作を祈る豊穣儀礼が生殖器崇拜に由来していることを話されるさいに、身振り手振りで話したおかしさは今もって忘れられない、こういった余談から民俗行事のもつ深い意義、民俗研究の重要性を学んだ、と護さんは回顧しております。それから土井虎賀寿さん、土井虎さんから心理学と論理学の講義を聴いたけれども、ともにこれまた型破りのもので、とくに論理学の講義では形式論理学については全く話さない、一年間にわたって聴いたのはレビ・ブリュールの「未開社会の思

惟」に関する説で、土井教授は、前論理的なるものは不合理ではないということを繰返し強調された、民族学あるいは未開社会の研究の面白さを教えられたのは、この土井教授の論理学の講義であつた、と護さんは言つております。三人目は安部健夫さんで、大学へ入るさいに東洋史学科を選んだのは、三高での安部健夫さんの東洋史の講義に強く惹かれたからである、と言つております。

護さんは、どうして東洋史を選んだのか、どうして東洋史の研究を志したのかと聞かれると、自分は三高在学中から何となく歴史学に関心を持つていた、それはあくまで原史料に基づかねばならぬということはおぼろげながら知つていたが、西洋史学、そのころの西洋史学はヨーロッパの学者の学説の紹介・解釈にすぎない、であるから西洋史学科に進む気は初めから全く持たなかつた、と言つています。私は西洋史の出身ですからよく分りますが、要するに、ヨーロッパの学説をフォローしていくことは今でも重要な仕事になつてるので、あの当時であればなおさら当然であります。残るのは日本史学と東洋史学ですが、当時の日本史学では皇国史觀が幅を利かしていたので、進路を歴史学に求めていた護さんにとつて、残された学問は東洋史学しかなかつたのです。つまり、原史料に直接基づいて、しかも国策に安直に役立つ「実学」ではない「虚学」、それは東洋史学しかないと思われた。人文科学は「実学」ではなく「虚学」である、というのが護さんの信念であり

ます。

そういうわけで東洋史を選ばれたのですが、護さんに三高で東洋史を教えたのは、先に述べた安部健夫さんでした。安部さんはその後京大の人文科学研究所に移られ、昭和一五年からはフランス留学から帰国されたばかりの羽田明さんになり、私どもは、この羽田亨京大総長の息子さんの羽田明さんに習いましたが、護さんのころは安部健夫さんでした。安部さんの東洋史というのは、中国民族史を中心としてはいましたが、ほかの概説書と違つて新鮮な名講義でした。安部さんは元代史を専攻しておられたので、当時の言葉でいうと塞外史、つまり、とりで・国境の外、とくに中国の万里の長城の北側、この塞外史について比較的詳しかつた。護さんが東洋史とくに塞外史の本当の面白さを初めて知つたのは、安部さんの講義からで、護さんは、自分が東洋史とりわけ塞外史についてもつと勉強したいと考え始めたのは三高在学中で、それは安部健夫先生の影響が大きい、と回顧しております。三高を卒業するころ護さんは、先生を訪ねて京大の東洋史へ行きたいと言つたところ、安部さんは、君は三年間も京都にいたのだからひとつ東京へ武者修行に行つてきたらどうか、東京には白鳥庫吉先生以来の伝統もあることだし、と答えられた。護さんは、自分が東京に出てくるのに一番大きかつたのは安部さんの一言であつた、と回顧しております。このように護さんが塞外史を勉強するようになったのは、三高の安部健夫さんの影響

であります。

もう一つ、東大時代の先生の影響であります。あの当時、和田清教授の講義で「明代の蒙古」というのがありました。それから、護さんが入ったころには、三上次男講師の満鮮中世史、山本達郎講師の東南アジア史がありました。つまり、中国民族史についての講義は少なかつたのです。私も昭和一七年一〇月に和田清さんの講義を聴きました。護さんのときは「明代の蒙古」でしたが、私のときは「清代の満洲」でした。和田さんの講義というものは、棒一本持ってくるだけで黒板に漢文史料をすらすらと書いていくのです。ちょっとつかえると、その棒で額をおさえると出てくる。そのようにして漢文史料を次から次へと書いていくのです。これは大変な記憶力で、こういう講義は和田さんの講義しか私は聴いたことがない、空前絶後のものであります。私が昭和一七年一〇月に東大に入りましたときには、一高教授の榎一雄さんが講師で、この方も亡くなりましたけれども、講義は「唐代の西域」で、これも中国民族史ではないのです。これは極めて実証的でした。毎時間他人の説を一つ一つ挙げて、これをこてんこてんにやつづけていく。しかもそれが極めて厳格で実証的であります。

同じように実証的な講義は、西洋史では村川堅太郎さんの講義がありました。丁度護さんが大学に入った昭和一六年の一月八日、この日は月曜日で一时限の講義は村川さんの

ローマ帝国史の講義で、護さんはその講義を聴いているのです。あれは確か一号館の一階です。いつも村川さんが講義する教室です。教室に隣り合つて法学部の事務室があり、そのラジオから「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入りました」という放送が、「軍艦マーチ」や「抜刀隊」の曲と共に間断なく流れていって、教室にいてもはつきり聞える。ところが村川さんは、戦争については一言も言及することなく、淡々と講義を進めていかれた。護さんは、傍にいた国史学科の学生が、この時世にラティフンディウム（古代ローマ大土地所有制）が何の役に立つかと言っていた、そのつぶやきは今日なお私の耳朶に残っている、ところが村川さんのこの講義こそ、今日唯今の社会には何の役にも立たない「虚学」研究の見事な成果ではないかと思つた、と言うのです。村川さんのこの態度こそ戦争に対する無言の抵抗であることを、護さんは感じ取つた。とくに歴史学を含む人文科学の研究に携わる者の使命はまさにこれであつて、人文科学は「実学」ではない、「虚学」である、これが護さんの信念であります。村川さんの講義もそうでありましたし、榎さんもそうでありました。すでに戦争は始まつていましたが、全然一言もそれに触れることのない授業は、あのころの東京帝国大学文学部の西洋史・東洋史の学風の一端をよく伝えるものであります。ただ、国史の平泉澄教授はまた別で、これについてはあると述べます。

話を前に戻して東大時代の先生の影響について述べますと、護さんは三高のときから塞外史に関心を持つていましたが、大学で和田教授の講義「明代の蒙古」を聴いているうちに次第にモンゴル民族史に興味を抱くようになりました。安部健夫さんが元代史を専攻しておられることにも影響されています。モンゴル帝国史について何か書こうと思つたとき、たまたま京都に行き安部さんを訪ねて、卒業論文ではモンゴル民族史について何か書きたいと言つたら、先生は、君は三高時代から塞外史に興味があつたようだから丁度いいではないか、和田さんもおられることだしと言わられたので、護さんは、先に述べましたように、モンゴル帝国の社会構成や国家構造と密接に関連する軍制を取上げることにしたのであります。

護さんが卒業論文でモンゴル帝国史を扱うことにした理由は、安部さんのほか和田教授を始め当時の東大の先生方から刺激を受けたことと共に、三高における土井虎の講義によつて、中国の歴史よりももつと泥臭いどころとした「未開」民族の歴史に魅力を感じた点にあります。護さんが『中央公論』（昭和五〇年一月号）の「学びの出発」という欄に寄せた、わずか二頁の大変面白い小文に、護さん自身がつけた表題は「ディオニゾスのさけび」であります。つまり、護さんは三高時代に手当たり次第乱読に近かつたが、その中で例のニーチェの *Also sprach Zarathustra* を始めとする一連の著作がありました。護さん

の言葉によると、ニーチェの、アポロ的清澄の底に潜む、より根源的なディオニゾス的なものの強調、それに私は惹かれた、ニーチェのいわゆる「ディオニゾス型衝動」に惹かれたのは、わが内なるものがそれに触発されて噴き出たのであって、寒々とした図書室で薄暗い電灯のもとに読んだ『史記』の「匈奴伝」や『成吉思汗実録』などに語られる遊牧騎馬民族のおどろおどろにどす黒い歴史が、中国のそれよりもはるかに生々しく私に迫った。私は自分自身の内なる「ディオニゾスのさけび」を聴く思いであった、というのです。それと同時に護さんが自ら言うように、「通へる夢は崑崙の高嶺の此方ゴビの原」、あの「紅もゆる」の一節に沙漠への夢をかき立てられたこともまた事実であり、三高生護雅夫のロマンがあつたのであります。こうして護さんは、漢文史料、モンゴル語史料、そしてペルシア語史料に拠つて、北アジア史の中のモンゴル帝国の国家構造に関する卒業論文を作成し、大学を卒業したのであります。

### 海軍兵学校時代

護さんは、大学卒業後、先に述べましたように海軍予備学生となり、江田島の海軍兵学校に配属されましたが、やがて数人の同僚と共に兵学校に残つて生徒に講義をすることになりました。課せられたのは国史の講義、与えられた教科書は平泉澄の『皇國護持の道』

で、この教科書による講義は本当につらく、天壤無窮史觀の誤謬を生徒に話すことが、せめてもの慰めであると共にささやかな抵抗でもあつた、と護さんは言つております。ところが、こうした言葉は生徒の日記を通じてすぐに兵学校出身の将校に伝わって、何度も呼びつけられては、「國賊」、「大逆思想の持主」とののしられたということです。このころの護さんについては阿川弘之の『井上成美』（新潮文庫）という本の中に出できます。護雅夫先生、専攻は東洋史だが新年早々から国史の講義を担当させられることになった、それに必要な単位は東大在学中に取つてはいたが、彼の平泉国史学の成績は実のところ「丙」であつた、というのです。平泉澄教授の時間にはいろいろなタブーがあつて、たとえば「君」という言葉は使つてはいけない。私も平泉さんの講義を聴きました。聴きましたけれど、今言つたように、タブーがあつて答案の書き方が難しい、だから試験は受けませんでした。普段の講義はなかなかリズミカルで、私は教室の後ろの方の日だまりで聴いていましたが、いい気持になつてくるような声です。講義の内容はそれほど右翼的ではないのですが、時々「私は君という言葉を使わない、君とは一天万乗の大君あるのみである、だからあなたと言う」と言われる。阿川さんの本にも書いてあります。「護君」とは呼ばず、「護さん」とこういふうに言うのです。答案に天皇の名前を記すときは、改行の上、一字あけて書く。それから聽講のさいは、うやうやしく正しい姿勢でなくてはいけない。

護さんは一度ほおづえをついて聴いていて、「出て行け」とどなられた、それから後醍醐天皇の名前を答案の行の方に書きこんだ、それで平泉国史学は「丙」なのです。平泉さんの試験の答案は書き方が難しい。吉田松陰なら吉田松陰「先生」と書かなければならない、ところが人物によつては、あるときに評価が変つて「先生」でなくなつた、そのときは呼捨てで書かなくてはいけない、これが難しい。基準が變るのですから。そういうことで私の聴いた平泉さんの講義、あれも今となつてみればもう歴史ですけれども、私は単位は取りませんでした。私は、平泉さんの国史の単位は取らないで卒業したのです。

話を海兵時代に戻しますと、当時海兵の校長であつた井上成美さんは非常に理解があつて、突然護さんの教室に入つてきて空いた席に座つて三〇分ばかり授業参観をして行つた。ところが校長の前だけ取繕うのがいやで、いつもの通り講義を続けたら、翌日史学科の科長から校長からの注意が届いていると言われてぎくりとなつたけれども、それは要するに口述のテンポが速すぎる、護さんは早口ですから、早口に対する注意だけで皇国史観批判については言及がなかつた。こういう話が阿川さんの本に出ています。また、『戦中戦後に青春を生きて——東大東洋史同期生の記録』(山川出版社)という本が出ていますが、これに護さんは「海軍兵学校・研究室・みづほ館」と題する一文を書いています。護さんは、戦後和田清教授の研究室に寝泊りしておりました。そのときの話とか、下宿のみづほ

館の話とか、敗戦にいたるまでの海軍兵学校の話とか、いろいろ面白い話があるのですが、今は時間の関係で省略いたします。ただ海兵時代の護さんの読書について一言話しておきます。もともと護さんは民俗学に興味を持ち、東大でも柳田国男さんの「日本の祭」と題する特別講義や和田さんが講義の合間にされた民俗学に関する話も関心を持つて聴き、また白鳥さんの民俗学関係の論文からも深い感銘を受けていました。ところが海軍兵学校の図書館には幸いなことに柳田国男や折口信夫の著書・論文があつたので、それをむさぼり読んでいました。実はこれが護さんが後年突厥碑文を読むときに非常に役立ったのです。護さんによると、自分はあとになって遊牧民族の固有信仰、宗教に関心を持ち、また突厥碑文を読み解いているうちに、民俗学的に考えて本当の意味がはつきりするものが多いのではないか、と思うようになつた。こういう考えを抱くようになったのは、とりわけ兵学校での読書の経験が大きく働いている、と回顧しております。

護さんの卒業論文についてはさらに話すことがあります、その前に私のことを申しますと、私は卒業論文というものは書かなかつた、「無論文・学士」なのです。二年終了で出征し、復員して三年に復学するつもりで研究室に行くと、山中謙二教授が奥から出てきて、あなたは卒業させておきました、事務室で卒業証書を受取つて下さい、と言われてびっくりしました。もつともあのときは、卒業に必要な二一単位のうち一八単位以上取つて

おれば、帰ってきてから卒業論文を書かせるということで卒業にしたのです。私は二年間で一九単位取つていて、取つていなければ国史の二単位だけで、三年は卒業論文に集中しようと思つていました。ところが帰つてみれば卒業論文を書かなくてもいいということでおれと私の前の学年、西洋史でいうと一高からきた穂積重行さんの学年と私の学年と私の学年は私一人ですけれども、卒業論文を書かずに卒業したので、当時「無論文・学士」といわれたのです。「無論、文学士」なのですが、「無論文学士」は切りようによつては「無論文・学士」になるわけです。私は、「無論文・学士」といわれていきましたので、学位論文を書いたのです。卒業論文を書いて学位論文を出さない人はいくらでもいますが、卒業論文を書かないで学位論文を書いたというのは珍しい。そういうわけで、私は卒業論文をほめられたということはないのですが、護さんは卒業論文を非常にほめられたのです。

### 古代トルコ民族史研究

護さんによると、卒業論文の相談会で諸先生が並んでおられる前で、護さんは自分の番になつたとき、「探馬赤軍」について調べてみようと思いますと言つた、すると、和田さんは、そんなものを調べて何か分りますかねえと言われた。ところが、卒業論文を出してから護さんが和田さんのところへ行くと、「あれは案外いいですよ、探馬赤軍について考

えてとにもかくにも一つの結論を出した、内外を通じて初めての論文だ、護さんは案外勉強するんですね、こりや案外でしたよ、ほんとに案外でした、高等学校はどこでしたか、ははん三高ですか、そういうえば浜口重国さん、羽田明さんみんな三高でしたね」と「案外」を連発されるのには参った、ということです。和田さんは、護さんの論文を高く評価して、論文の一部を何かの雑誌に発表してはどうかと言われた。それで護さんは、その膨大な論文の四分の一を二つに分けて整理し清書して先生に渡し、海軍兵学校に入校したのです。その二つの論文は、和田さんの推薦によつて『史学雑誌』と『北亞細亞學報』に掲載され、それを和田さんが、護さんが軍務に服している最中に、『読書新聞』の中で最近公刊された注目すべき論文として取上げられた。そういうわけで、和田さんは、護さんの卒業論文を大変高く評価して、敗戦後護さんの復員を見越して、護さんの知らないうちに大学院への復学と特別研究生への採用の処置をとられたのです。

特別研究生に採用されたときの研究題目は、モンゴル帝国史でありました。けれども、護さんは研究室に戻つたものの、モンゴル帝国に関する史料は疎開されたままで、研究の継続は不可能でした。そこで対象とする時代をさかのぼらせて突厥帝国、これは六世紀から八世紀にかけて、古代トルコ民族によつてモンゴル高原に建国された遊牧騎馬民族国家ですが、この突厥の研究を始めたわけです。この時期に護さんは、匈奴帝国などいろいろ

と研究分野を拡げていきましたけれども、結局突厥に集中しました。ところがこの突厥であります、手近には漢文史料しかないので、研究を進めるに当つては、突厥碑文つまり古代トルコ語碑文を利用しなければならない。そこで護さんは、昭和三三年三月から翌年一〇月にかけて、トルコと西ドイツへ留学したのです。これは護さんの研究上の一つの転機でありました。まずトルコでは、イスタンブル大学のトルコ学者、トルコのフィロロジストですが、この学者から古代トルコ語、つまり突厥語、ウイグル語（ウイグルも突厥を亡ぼしたやはりトルコ系の民族です）の個人教授を受けたのです。それから西ドイツへ行って、ハンブルク大学でこれまた古代トルコ語の個人教授を受けました。護さんによると、トルコ・西ドイツへの留学以前における自分の突厥史研究はもっぱら漢文史料に基づいていた、ところが帰国後は、この両教授から仕込まれた古代トルコ語、いわゆる突厥碑文とウイグル文書とのフィロロジカルな研究に力を注いで、これと漢文史料の伝えるところによりつつ、突厥帝国さらにはウイグル王国史を明らかにしようとした。さらに護さん自身の言葉によると、わが国におけるトルコ学は、白鳥庫吉博士とりわけ羽田亨博士によつてその基礎が築かれてはいたが、自分がもしわが国における新しいトルコ学の成長発展に寄与したとするならば、それは、自分が古代トルコ語碑文・文書のフィロロジカルな研究という「職人」的な「虚学」に、「美学」ではない「虚学」に徹してきたからにはかなならな

い、というのであります。その成果が、まず『古代トルコ民族史研究』I（山川出版社）であります。

この『古代トルコ民族史研究』は、このあとの刊行を含めれば全三巻から成る大作で、昭和四二年に出版された第一巻が、先に述べたように四五五年に日本学士院賞を授与されました。この第一巻だけで六百何十頁という大冊です。その「序文」に護さんが自分の研究経過等を述べておりますから、それに基づいて話しますと、自分の北アジア史研究の中心は匈奴・突厥・モンゴル帝国にあつたが、最近の一〇年余りの自分の主要な研究対象は、古代トルコ民族、なかでも突厥とウイグルにあつた、これらのうち突厥の歴史に關係する主な論文だけを集めたのが本書である、ということであります。さらに護さんによると、突厥史の究明のための重要な史料として、漢文史料と並んでいわゆる突厥碑文があるが、正直なところわが国には、このトルコーフィロロジイの伝統は全く根を下ろしていない、であるから、自分は突厥碑文の利用に当つてソ連邦・ドイツ・トルコにおけるトルコーフィロロジイ研究の成果によらざるをえなかつた。ただし、これらの諸学者の貢献は確かに大きいけれども、彼らの立場は、あくまでフィロロジストのそれであつて、歴史家としての立場ではない。自分は、歴史家の立場から突厥碑文を古代トルコ民族の国家構造・社会構成の研究に利用し、あわせて漢文史料からの究明を行ふに当つては、ほとんど無から出

發せざるをえなかつた。つまり、古代トルコ民族の國家構造・社会構成の研究を目標にして、突厥碑文と漢文史料との総合的検討をすすめているうちに、自分は袋小路に入つてしまつた。そこで、その袋小路から脱出する道として、とくにソ連の諸学者の手で盛んに行われている南シベリア、アルタイ地域の考古学的発掘の成果をも利用せねばならなかつた。これら三者を比較・考察しているあいだに、自分の頭には古代トルコ民族の国家構造・社会構成のイメージがしだいに出来上がってきました、といふのです。本書の「凡例」によると、普通には小アジアのトルコ民族・トルコ語に「トルコ」の語を冠し、小アジアに入る以前のトルコ系諸族、それらの使用した言語は「チュルク」の名をもつて呼ぶ、従つて本書は厳密には「古代チュルク民族史研究」と題すべきであるが、「チュルク」の語が未だ一般には耳慣れないので題名のみ「トルコ」とした、本書は古代チュルク民族のうちの突厥、しかもそのうちのいわゆる東突厥のみを取扱つてゐる、といふことであります。

この突厥というのは、先にも述べたように、モンゴル高原に建国されたトルコ民族による世界史上最初の遊牧騎馬民族国家でありますので、トルコ共和国は、このAD五五二年の突厥建国をもつてトルコ共和国の建国の年としており、それで一九五二年にトルコ建国一四〇〇年記念祝典が行われたのであります。普通トルコというと、一一世紀から一二世纪にかけて栄えたセルジューク・トルコ、それから、一三世紀末から二〇世紀の二〇年代

まで続いたオスマン＝トルコのことで、ことにオスマン＝トルコは、一四五三年に東ローマ帝国を滅亡させ、一六世紀には全盛を誇つたことで有名であります。それらは、もともと内陸アジアで遊牧していたトルコ民族が、イスラムに改宗し、小アジアを含む西アジアに建てた国家でした。西アジア史は普通、一一世紀以後の西アジア自体の歴史だけしか取上げないので、護さんは、一一世紀以後の西アジア史は、西アジアそれ自体のイスラムを含む古代から現代にいたる歴史と、内陸アジアの歴史つまり東から西へ移動した遊牧トルコ民族の歴史、この二つの歴史の交錯の上に展開してきたものである、つまりトルコ民族固有の遊牧的な伝統文化を考慮しなければならない、と主張するのであります。そういう広い観点からする西アジア史の研究、普通の小アジアだけではなく内陸アジアも見なくてはならない、それが今後の課題、護さんの意図するトルコ民族史であり、その第一頁がこの突厥帝国史であります。

参考として、護さんが一般向きに書かれた著書を若干紹介しておきます。まず『古代遊牧帝国』（中公新書）、これは現在品切です。これには突厥文字、突厥碑文、突厥国家史、これらが一般向きに書かれてはいますが、なかなか難しく、とても普通の者に読めるものではありません。そのほかに『遊牧騎馬民族国家』と『李陵』があります。『遊牧騎馬民族国家』（講談社現代新書）は数年前に復刊されましたが、今はなかなか手に入らないよ

うです。『李陵』（中公文庫）の方は今でも手に入ります。『遊牧騎馬民族国家』ですが、江上波夫さんの有名な東北アジア系騎馬民族の日本征服説いわゆる騎馬民族日本征服説——江上さんの『騎馬民族国家』（中公新書）の中には護さんのことも出てきます——この征服説との関連つまり天皇家の起源の問題との関連で、護さんはこのことに関して賛否は言いませんけれども、これを念頭において『遊牧騎馬民族国家』を書いており、非常に面白いものです。それから『李陵』ですが、同じ題名ですでに作家の中島敦の書いたものがあります。護さんはそれを読んで、別の観点からこの『李陵』を書いたのです。ですから、歴史小説と歴史家の仕事の違いということもあり、これはこれで面白い問題があります。

最後に、以上述べましたように、護さんの関心はモンゴル帝国から出発して、とくに突厥帝国つまりモンゴル高原における遊牧騎馬民族国家にありました。そこには諸先学からの影響、とりわけ三高時代の土井虎からの影響、また「紅もゆる」にかき立てられた「高嶺の此方ゴビの原」モンゴル高原への夢があつたのであります。日本学士院賞を受賞された大著『古代トルコ民族史研究』は、実に「三高生護雅夫」の夢の結実であります。